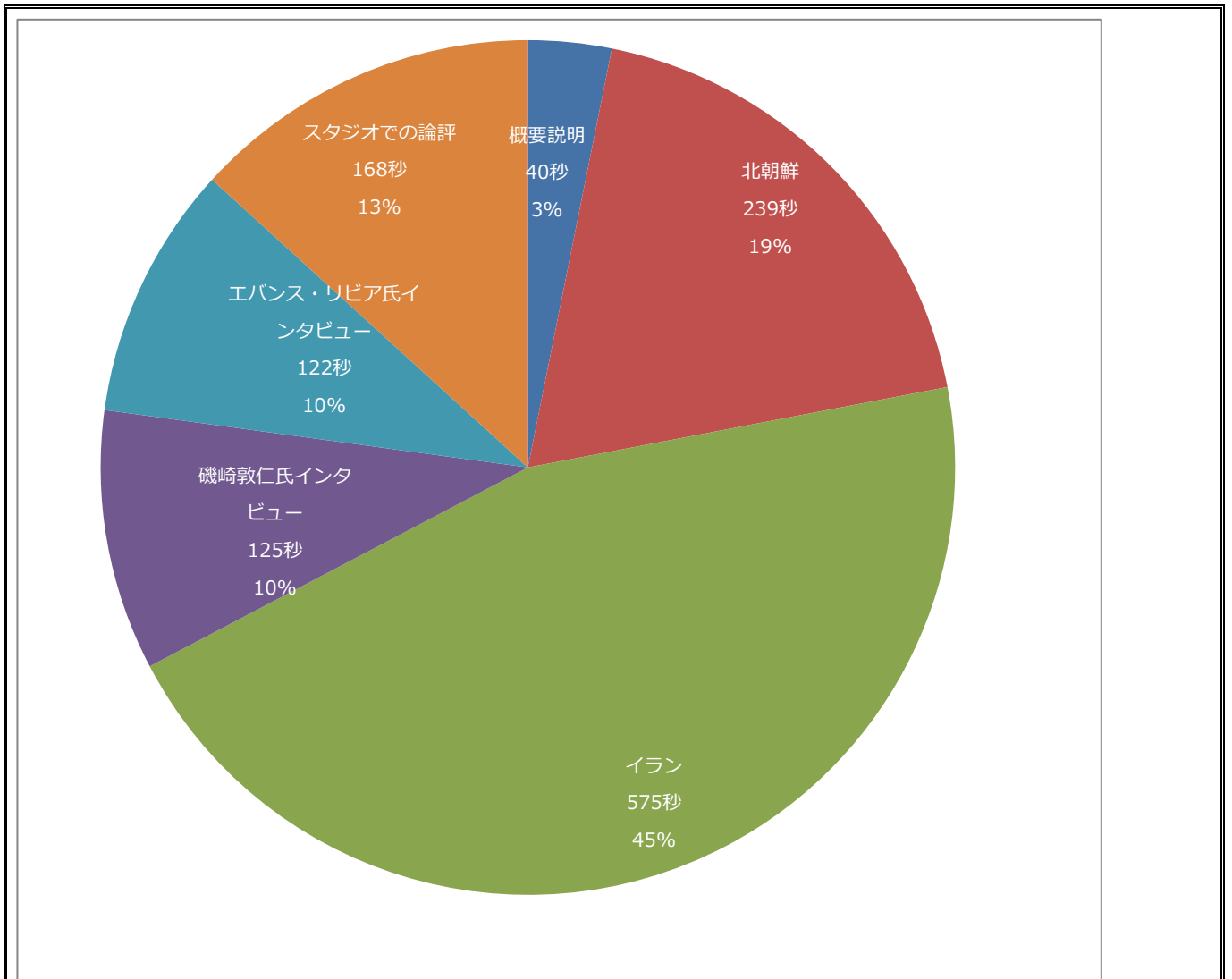


TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日： 2018 年 5 月 12 日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子		
検証テーマ： アメリカ国務長官が北朝鮮に完全非核化促す 【特集】 北朝鮮とイランの核、トランプ大統領の狙い		
報道トピック一覧 <ul style="list-style-type: none"> ・新潟県、小 2 女子遺体発見事件から一週間 ・長野県北部で震度 5 弱の地震 ・京都祇園の料理店から出火 ・沖縄県うるま市、スクールバスとワゴン車が事故 ・アメリカ国務長官、北朝鮮に完全非核化促す ・北海道でもエゾヤマザクラ開花 ・広島県でのぼり平和資料室 ・スイスの過疎地域ゴンドーで仮想通貨の拠点 ・マレーシアの政権交代、ナジブ前首相が出国禁止に ・栃木県の高校で女子生徒三人が高校で飛び降り自殺か ・お台場で 2022 年東京五輪の新種目披露イベント、キメラゲームス ・埼玉県伊奈町のバラ園で 5000 株のバラに包まれウェディング ・【特集】 北朝鮮とイランの核、トランプ大統領の狙い ・【特集】 少子高齢化に直面する中国 ・スポーツ報道 		
放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨 <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ国務長官が北朝鮮に非核化を促す アメリカのポンペオ国務長官は「アメリカは過去に敵対したが現在は親密になった国がたくさんある」として北朝鮮の金正恩党委員長に来月の米朝首脳会談で完全な非核化に合意するよう促していることが明らかになったことが報じられた。このトピックについて当てられた時間は 85 秒で、放送法上の問題は特に見られなかった。 ・【特集】 北朝鮮とイランの核、トランプ大統領の狙い 北朝鮮に対しては対話を進める一方でイランに対してはオバマ政権時代に米・英・仏・独・中・露の六カ国で合意されたイラン核合意から離脱するという対照的な姿勢を示しているトランプ大統領の外交政策について特集されていた。この特集では北朝鮮とアメリカの関係、イラン核合意、両方のトピックにまたがる概要説明、慶應義塾大学で北朝鮮政治を専門とする磯崎敦仁准教授へのインタビュー、ブッシュ政権下で国務次官補代理を務め北朝鮮との外交交渉を担当したエバンス・リビア氏へのインタビューというポイントが取り上げられていた。これらのポイントについての時間配分および賛否の比率は以下の通りであった。 		



北朝鮮については北朝鮮に拘束されていた三人のアメリカ人が解放されたこと、トランプ大統領夫妻と副大統領が真夜中にもかかわらずこの三人を出迎えたこと、この出来事をうけてのアメリカ市民の好意的な反応が取り上げられていた。

イランについては核合意がオバマ政権のレガシーであったこと、トランプ大統領は大統領選の段階で既にこの角合意に対してイラン核合意について核開発計画を期限付きでしか制限していないことや弾道ミサイルの開発などを制限していないことを一貫して問題視してきたことが取り上げられた。また、イランで核技術者の暗殺が起きていることも取り上げられ殺害された各技術者の妻へのインタビューでは以下に朱記したやり取りが伝えられた。

ナレ「核合意に至るまでの長い話し合いが続く中、イランでは核技術者の暗殺事件が相次いだ。2011年に殺害されたダリウシュ・レザイネジャドさん、イランの核開発プログラムに参加し遠心分離機に関する仕事をしていたという。」

村瀬健介(報告「こちらが暗殺されたレザイネジャドさんの自宅だった場所ですけれども、こちらの車の出入り口で暗殺者は待ち伏せをしていました。）」

ナレ「妻のショーレ・ピラニさんが当時のことを話してくれた。襲われたのは幼稚園に娘を車で迎えに行き、三人で帰宅するところだったという。」

ショーレ・ピラニさん「夫はリモコンで駐車場のゲートを開けようとしていました。その瞬間、暗殺者が運転席の窓

のすぐ近くに来て銃を何発も撃ったんです。」

ナレ「これは暗殺直後の映像。運転席で横たわっているのがレザイネジャドさんだ。」

ピラニ「何度も打たれ、私の方に倒れてきました、私と娘はその瞬間を今でも覚えています。夫の頭から血が顔を伝って華から一滴一滴落ちていきました。」

ナレ「レザイネジャドさんは事件の前から見の危険を感じていたという。」

ピラニ「私の夫が殺される前にイランの核科学者が2人暗殺されていました。その科学者たちは夫の仕事の同僚なのでよく知っていました。だから夫も同じように狙われるかもしれない、とすごく気をつけていたんです。」

ナレ「レザイネジャドさんは備考もされていたという。また、イランの核開発から遠ざけるためなのか、海外からの不振な誘いも頻繁にあったと妻のピラニさんは話す。」

ピラニ「旅費や生活費や学費の援助付きで海外に永住させてくれるという提案を受けました。あなたの専門性を必要としている、という内容でした。でも、夫はすべて断りました。夫は核に関する知識がある核開発に関係してから暗殺されたんだと確信しています。」

ナレ「2010年に殺害されたアリモハマディさん、テヘラン大学の原子物理学の教授でイランの核開発に関わっていた。妻のマンズレー・キャラミさんによると、夫は仕事に行こうと家を出た直後に殺害されたという

マンズレー・キャラミ「玄関で見送る私に言ってきますと行って彼がドアを締めた直後、爆弾が爆発したんです。」

ナレ「家の前に止まっていたバイクに遠隔操作の爆弾が仕掛けられていたという。」

キャラミ「ガラスが私の頭の上に振ってきて、その時は地震で建物が崩れた、と思いました。娘からママ何があったの私のベッドがガラスだらけよ、と言われ、その時、夫のいる車の方だとわかり、娘と一緒に夫の方に急いで向かったんです。倒れていた夫は血が流れてないように見えたので、一瞬無事だと思いました。でもいくら声をかけても、返事はありませんでした。私は爆発で気が動転しながら何度も夫の名前を呼びました、マッスード、マッスード、マッスードと引き寄せて目を覚まさせるために顔を叩こうとしたら頭が半分なくなっていたんです。」

ナレ「アリモハマディさんにも暗殺前に海外への誘いが何度もあったという。この事件を巡って、イランの司法当局はイスラエルの情報機関モサドの職員とされる人物に死刑を言い渡し、執行している。」

キャラミ「彼らは核に関する技術をコントロールしようとする学者を殺したり、テロを起こしたりして、自分たちの都合のいいようにその国の科学力を抑えようとするんです。」

ナレ「アメリカとの交渉次第では北朝鮮でも同じことが起きるかもしれない、と話す。」

キャラミさん「言うことを聞かないと確実に事件が起きるでしょう。投獄されるか夫のようにテロで殺されるか、彼らがどうなるかは神にしか分かりません。」

磯崎敦仁准教授へのインタビューでは以下に朱記したやり取りが取り上げられていた。

ナレ「北朝鮮は完全な各放棄をする意思が本当にあるのか、科学者や技術者はどうなるのか、北朝鮮政治が専門の慶応大学磯崎敦仁准教授はこう見ている」

磯崎敦仁「完全な核放棄を目指すそれに対して北朝鮮が同意しないのであれば、これは米朝首脳会談をやらなくてもよいということに双方なるわけですから、北としては当然それを用意しているということになる。」

日下部「あの、一部ではですね、例えば技術者の移住ですね、北朝鮮からの移住とか、まあデータの完全放棄、こういった事も言われてますが、先生、実際こういった要求はアメリカはしてるって見えますか。」

磯崎「データの完全放棄というのは必要になります、しかしアメリカがどこまで査察できるかという問題に関わってきますね。そして技術者をどうするか、これ国外移住させるのは非常に難しい問題だと思いますね、ですの

でおそらくアメリカ側と共にそういった北朝鮮の技術者と共同プロジェクトを立ち上げてアメリカの監視下に置く、こういった妥協策というのを模索していくことになろうかと思います。」

日下部「あの、若い正恩委員長をそこまで決断させた背景というのは何だと先生は思いますか。」

磯崎「これは状況証拠に過ぎません。残念ながら状況証拠に過ぎませんが、しかし仰った通り、若さ、だと思いますね。まだ金正恩委員長は 34 歳これから何十年もあの体制をあの体制のまま率いていく必要がある、で、北朝鮮が社会主義というものを放棄するとか、北朝鮮が自分たちの統制された体制を放棄するっていうこういうものではないんです、今の体制をそのまま温存するために、どうやってアメリカと取引をしていくか、っていうことが今の段階なんですね、ですからそういう言う意味では予断を許すものでもないですし楽観的に見るばかりのものではないですよ、たとえ核放棄をするっていう決断に至ったとしてもですよ。」

エバンス・リビア氏へのインタビューでは以下に朱記したやり取りが取り上げられていた。

金平茂紀「金正恩氏は核兵器を放棄しないと思うか？」

エバンス・リビア(元国務長官補代理「放棄するとは思えません。これほど苦勞して手に入れたものを手放すとは考えにくいです。」

ナレ「こう話すのはブッシュ政権下で国務次官補代理を務め北朝鮮との外交交渉を担当したエバンス・リビア氏、」
リビア「北朝鮮はアメリカとの取引を望んでいます。それは最終的に時刻の核兵器を温存することが許されるようにすることです。核施設の全てとまでは行かないとは思いますが、引き続き抑止力の一環として核兵器や原子力などを保持すること、それを望んでいるのです。」

ナレ「イラン核合意からの離脱が米朝首脳会談に影響を与えると見ている。」

金平「北朝鮮はどう反応するか？」

リビア「良い質問です。私が政府内にいた頃、交渉相手たちからはいつもアメリカ政府は一貫性・継続性がない、だから信頼できない、それが最大の問題だと言われ続けてきました。大袈裟な言い方だとは思いますがね。北朝鮮は今回の件も、同じように見ているでしょう。つまり、アメリカがまた約束を守らなかったと批判するチャンスを彼らは決して逃さないのです。アメリカに対してより深い疑い、さらにはより深い不信感を持ってやってくるでしょう。現在の不信感は根深いのです。」

スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられた。

膳場「あの最後にインタビューに応じてくれました、元国務次官補代理のリビア氏の話聞いてますと、北朝鮮の非核化に随分悲観的でしたけど、これってあのトランプ大統領の見通しとは大分違うんじゃないですか？」

金平「うん、確かにね、トランプ大統領ってのは米朝については大成功するって、前のめりになっているんですけども非核化を巡っては実は専門家の中にもですね、アメリカの、楽観論と悲観論の両方があるんですね、今回詳しく紹介できませんけれども元中韓大使のドナルド・グレッグ氏っていうのがいてですね、これとっても面白かったんですけども、グレッグ氏がある種の感慨を込めてイベンチャリー、最終的には北朝鮮も核兵器を放棄せざるを得ないだろう、今回は、そういう楽観論を見せたんですけども、北朝鮮というのはもっと長いレンジで 20 年とか 30 年というレンジで国家戦略を立てていると、一方のトランプ氏は間近の中間選挙とか二年後の再選、大統領選挙の再選みたいな短いレンジで見えていて、奇妙なことにその両者の利害が一致しちゃった、と。歴史というのはそういう奇妙な偶然で動くことがあるんですね。」

膳場「ところでそのトランプ大統領ですけども拘束されたアメリカ人を空軍基地で、米軍基地で出迎えたの深夜 3 時でしたよね、ある種、すごいパフォーマンスに見えたんですけども」

金平「実は僕ら、その前の夜に DC に入って、ワシントン DC に入ってダメ元で申し込んだらね、全員来てください、みたいになって、よほどね、多分、報道してほしいかっただと思えますよ、いかにもトランプ的だなと思

ったんですが、実はその前日まではこれ新聞、当日なんですがイランにね、イランに対する核合意を放棄したっていうの、ワシントン・ポストもニューヨーク・タイムズも一面トップで徹底的に叩いていたんですよ、それがさっきの三人の開放劇でなんか吹っ飛んじやった、という印象を受けますね、」

日下部「北朝鮮もトランプ大統領の正確とかよく分析してはいますね、向こうがディールが好きだったらこっちも取引に乗ってやろうじゃないか、って部分があると思うんですね、北朝鮮から見ると韓国は思いがけず北朝鮮に理解のある政権が生まれた、アメリカにはですね泡沫と言われたトランプ氏が大統領になって正恩氏とあってもいいと、北朝鮮にとっては願ってもないチャンス、かもしれませんよね。こういった意味ではね。ですから、思い切ったディールにね、もしかしたら乗ってくる可能性もあるかもしれませんね。」

インタビューやスタジオの論評で焦点の当てられたテーマは北朝鮮についてだったことから、北朝鮮とイランへのアメリカの対応という特集と銘打っているのに相違ない時間配分だったと言える。

放送法の観点からは明確に指摘できる点は見受けられなかったものの、抵触する可能性がある箇所が見られ、それについては所感で指摘を行った。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

・【特集】北朝鮮とイランの核、トランプ大統領の狙い：結論→やや問題あり

ナレ「アリモハマディさんにも暗殺前に海外への誘いが何度もあったという。この事件を巡って、イランの司法当局はイスラエルの情報機関モサドの работникとされる人物に死刑を言い渡し、執行している。」

キャラミ「彼らは核に関する技術をコントロールしようとする学者を殺したり、テロを起こしたりして、自分たちの都合のいいようにその国の科学力を抑えようとするんです。」

ナレ「アメリカとの交渉次第では北朝鮮でも同じことが起きるかもしれない、と話す。」

キャラミさん「言うことを聞かないと確実に事件が起きるでしょう。投獄されるか夫のようにテロで殺されるか、彼らがどうなるかは神にしか分かりません。」

というシーンについては、アリモハマディさん暗殺の犯人についてイランの司法当局はイスラエルの情報機関モサドの работникとされる人物を犯人として死刑を言い渡した上執行しているが、この後のキャラミさんが「彼ら」という言葉を受けてのナレーションで「アメリカとの交渉」と言っている。これについて、この構成ではイランの核技術者暗殺の黒幕はアメリカであるかのような印象を受けるものであったが、実際にはイスラエルのモサドとアメリカの関係についてこの特集では言及がされておらず実際との関係がどうであるかは明確には言及されておらず、視聴者に対して特定の印象を与える恐れのあるものであったと言える。

検証者所感

・【特集】北朝鮮とイランの核、トランプ大統領の狙い

オープニングの場面で金平キャスターが「米朝会談を前に北朝鮮から解放されたアメリカ人三人がアメリカに帰ってきたのを目の前で見えました。深夜3時にトランプ大統領が出迎えていました。そこでトランプ氏はこの時刻の視聴率では過去最高だろうな、と喋ったのを見た、来月12日のシンガポールはどうなるのでしょうか、特集で考えます。」とコメントしていた。ここで「言いました」などの穏当な表現ではなく「言っただけ」という言葉を選んだあたりに金平キャスターのトランプ大統領への悪意を感じた。こうした発言は放送法第四条一項二号の「政治的に公平であること」という観点からも問題となる可能性もあるが、それに加えて、特集や取材の対象に対して露骨に悪意や憎悪を滲ませた表現を冒頭で行うことは、視聴者に対して不必要に悪意を増幅さ

せてしまうおそれや、報道番組全体が政治的に特定の立場(今回であれば反トランプ)に偏っているという印象を視聴者に対して抱かせてしまう恐れがあるという点で「報道番組」としては問題があるのではないだろうか。

アメリカと北朝鮮のレンジの違いについては定期的に選挙が行われるアメリカの大統領であれば誰であれ、直近の選挙や自身の再選という短いレンジを無視することができないようになっているが、北朝鮮であればそうしたものがないので、選挙や国内世論をアメリカや他の民主主義国よりも無視ないし軽視して外交戦略を立てることが可能であるという、国内の政治体制の相違によるものであり、北朝鮮と比べて短期的なレンジでしか見ていないとか、近視眼的だというのはトランプ大統領に固有の問題なのではなく、選挙が機能している民主国家の宿命というべきものであろう。